



ついのべまとめ



2011年
10月～12月

みずきあかね

公園でピクニック。

木漏れ日がちらちらと顔に散らばるのをわずらわしそうに手をかざしながら、あなたはお昼寝中。

お昼を食べてすぐ寝ると牛になりますよって囁いても知らんぷり。

空には小鳥。草原には親子連れが遊ぶ姿。

退屈。

日だまりの猫みたいに私も昼寝しよう。

牛はやだけど。

☆☆☆

「結婚式でお姫様抱っこって女の子の夢なんだろう？ 俺がんばる」

と言われて困惑した。

自分の体重プラスドレスってかなり重い。

もやしで非力な彼には気の毒で、負担を減らそうとダイエットした。

当日彼の腕の中で現実となった姫抱きに瞳を合わせて笑った。

お互いの作戦は大成功。

☆☆☆

夏、日陰を求めて小さな花屋に入った。

中はひんやりと冷たくてとても気持ちがいい。

ケースの中に紫や赤や黄色のバラを眺めていると

「いらっしゃいませ」

振り向けばすっげ綺麗なお兄さんがいた。

その迫力に負けて薔薇の花束を買っちゃって今では常連。

現状維持な関係はそのうちに。

☆☆☆

電車に乗ってすぐ先輩を探したけど見つからない。

今日は生徒会で遅くなったかな？

吊革に掴まって揺られていると、

「あ...」

オレンジ色の夕日が照らす通過駅のホームにはすごくたくさんの方がいるのに、どうして本を読んでいる先輩を見つけられたのかな？

不思議だけど嬉しい。

(ツイノベの日・お題・鉄道)

☆☆☆

彼が紅葉を見ようというのでドライブに出かけた。

1時間ほどドライブして紅葉が美しい山にたどり着いた。

車を降りてふかふかの落ち葉にくるぶしまで埋まりながら森の中を歩くと、昔話に出てきそうな一軒の廃屋に着いた。

「ここに住んでたんだ」

彼は懐かしそうに愛おしそうに笑う。

☆☆☆

「僕のこと好きですか？」

と聞かれた。

部活の後輩と波風立てたくないから

「普通に好きだけど？」

答えたら満足そうな顔をして

「僕も好き」

って言われてようやく告白だって気がついた。

「あああくまで後輩としてだからな！」

と念を押したら

「今はね」

って余裕な笑顔。

やだこいつ。

☆☆☆

目が覚めてしまった。

隣で眠る君を起こさないようにベッドから出て、カーテンの隙間から外を見るとまっ暗なはずの東の空は少しだけ明るい。

太陽が攻めてくるにはまだ時間があるから、ベッドに戻って君との時間を大事にしよう。

あと3時間で海外へ長期出張。

遠距離恋愛が始まる。

☆☆☆

桜吹雪の下で絶好のタイミングで告白したのに

「またまた冗談を」

って背中ばんばん叩かれた。

期待が大きかった分、落ち込むわ。

それから鈍感すぎる彼にアタックしまくってるのに秋になってもOKもらえず。

まさか……

「もしかしてわざと？」

恐る恐る聞くと、彼はにやんと笑った。

☆☆☆

ケーキを食べる夢を見た。

手の平サイズからとんでもなく大きい物まで所狭しと並べられたテーブルを君と向かい合わせで座って、

「腐る前に食べよう」

僕たちは好物を大きなスプーンですくって食べた。

ひたすら甘く幸せな夢。

朝、君の髪から漂うバニラの香りに頬がゆるんだ。

☆☆☆

後輩の下宿の前を通りがかったら突然の土砂降り。

ちょうどいいから雨宿りに寄ってみた。

突然来た私にタオルを放り投げるとヤツは煙草に火を付けて床に座った。

ごしごし頭を拭いて体も拭いて鞆もと思った時

「背骨見えてる」

と低い声。まさか透けてる！？って慌てたら

「うっそ～」

バカあ！

☆☆☆

君と別れてから数日が経つ。

あの子はそれまでと変わらず寝る前にメールをくれる。

逢いたいなとか好きだよとか。とてもあの子らしい。

僕は返事をせずに携帯を閉じる。

心の底であの子が好きな僕が返事をしたいとくすぐるけど我慢。

だって幽霊からメールが来たらあの子が泣くだろう？

☆☆☆

君のために作ってきたクッキー。

僕に無関心な君には迷惑かな？

「男がクッキー作るの？」とか言われなにかちょっと心配だけど得意な物といえこれくらいし
かなくて。

昼休み終了直前、破裂しそうな心臓を深呼吸で静める。

渡り廊下をゆっくり歩いてくる君に突撃するまであと20秒。

浅瀬で寄せて返す波に体を任せて生きていくのがちょうどいい。
たまに鳥が来て仲間達を連れて行くけど、固い殻に身を包んで砂の奥深くに隠れれば大丈夫。
温かい砂の中で周りに無関心な夢を見ていたかった。
だから君を見つけたくなかった。
ここから出て君を抱きしめたくなるから。

☆☆☆

廊下に引かれた黄色いテープの先は三年生の領域。
下級生は用事がなければ中に入れない。
先輩との仲も線を引かれたみたいに現状維持のまま。
ううん、ちがうの。
ホントは私が臆病で先に進めないだけ。
つま先でそっと線に触れてみる。
ぴりっと足先が痺れたようで足を引っ込めた。

☆☆☆

目の前の背中が震えているのに声をかけられない。
あなたは私を知らないから。
あなたをフった彼女には好きな人がいて、その人との思いが叶ったばかりなの。
叶わぬ恋って辛いから私が仲を取り持ったわ。
彼女の気持ちよくわかるから。
あなたはまた恋をするのかしら。
私でない誰かと。

☆☆☆

「おいっ」

と手をつかまれて指先が熱いのに気がついた。
水道を出しっぱなしにして指先を冷やしてくれている彼の真剣な顔。
鍋で牛乳を温めようとして指先を焼いたみたい。
あんまり痛くないし大丈夫かなと思った火傷は夜になってひりついた。
彼女の所へ帰った彼を思う心と一緒に。

☆☆☆

難破船じゃねえし岸も見えているのに、なんで彼女は涙声なんだ。

俺頼りない？

「きっと穴が開いて沈んじゃうよ」

は？

「悲観的になるな。絶対沈まないから」

公園の池のど真ん中で故障したスワンボート。

管理人には合図したからすぐ来るだろうけど、初デートでこんな二人きりは不吉。

☆☆☆

久しぶりのおしゃれに途惑いながら、鏡の前に立つ。

やっぱりもうこの服は着られないか。

あの頃のお気に入りか似合わなくなっているのはショック。

でも最近買ってくれたあの服はよく似合うから、やっぱりあれにしよう。

急いで着替えて出なくては。

今日は主人と久々のデート。

☆☆☆

僕に告白した彼女にその気がないと伝えると罵りながら取り巻き連中と去っていった。

僕には好きな人がいる。

彼女の後ろで自信なさげに佇み蔑まされ虐げられてる取り巻きの一人だ。

「女王様のお守りは大変だね」

って言うと

「友達だから」

と傍げに笑う健気な馬鹿が好きなんだ。

☆☆☆

朝が明るいと思ったのは、いつ以来だろう。

締め切ったカーテンを思いきり開けられて

「おはよう」

って朝の光のように君が笑う。

週明けから風邪で寝込んでいた僕に君は容赦がない。

熱も引いたし今日から動けそうだけど、まだ寝込んでいたかったな。
君との夢を存分に見られるから。

☆☆☆

真っ青の空に桜が映える。
ちらちらと降り注ぐ花びらと共に光が乱舞する。
なんて綺麗なんだろうと見上げると、背の高い彼は私をのぞき込んで唇に器用にキスをした。
暑い夏を過ぎ美しい秋が過ぎた今、灰色の空に黒い幹が映える。
ほとほとと牡丹雪が顔に落ちて涙になり、頬を伝う。

☆☆☆

春の鶯も夏の蝉も秋の鈴虫も、恋の季節に恋を歌う。
人も猫も世界中の生き物が恋の歌を知ってるんだ。
世界は恋で満ちている。

☆☆☆

赤い糸を見たことはあるだろうか。
俺はある。
俺の小指に結ばれているから。
最初は家庭科の糸が絡まったのだと思って何度かほどこうとしたが、実際触ることさえできない。
この糸の先には運命の相手がいるらしい。
でもそいつが現れたとしても今隣にいる彼女を手放さないと誓える。

「今日は良い夫婦の日らしいから、今夜はよくふーふーできるあつあつおでんにしようかと思う」

と夫に宣言したら、変な顔をされた。

ちえっ面白くなかったんだ。

がっかりしてたら

「僕はおでんよりもあつあつの奥さんの方がいいんですけど」

と耳元で囁かれた。

ちくしょーっやられた！

☆☆☆

彼の服の裾を掴んで二人で赤い夕日を見上げた。

背中に抱きついて顔を埋めると、なんだか汗臭くてやだなあって笑えて泣けた。

「どした？」

「どうもしないよ」

って答えて顔をこすりつけた。

「夕日が赤いなあって」

「ふーん」

でもちょっぴり泣けるんだよ。

君と二人っきりって。

☆☆☆

一人ぼっちの孤独ってこんなに淋しく悲しく切ないんだ。

なんて思うのは弱っている証拠ね。

熱でぼやっとする目を閉じる。

そして決して自分の物にならない人に会いたいと心の中で呼び掛ける。

電話とかしてこないかな？

「大丈夫？」

だけでいいから。

他には何も望まないから。

☆☆☆

干支が一巡して十二回年を取った。

鏡の向こうに十二年前とひと味違う自分があるはずだったのに、あの頃と同じような服装で同じような考え方をして相変わらずそばにいるあなたが私を甘やかしていた。

「あなたのせいよ」

と睨むと

「そのままの君が好きだから」

と言われて答えに詰まった。

(ツイノベの日・お題・一巡・ふりだしに戻る)

☆☆☆

今日から師走。

先生は忙しそうに走り回っている。

廊下を走るなど生徒に言うくせに自分は走るんだから、自分勝手だ。

放課後生徒会室で仕事して廊下に出たら彼女がまだ走っていたから目の前に立ちふさがった。

「忙しいそうですね」

彼女は笑う。

「クリスマス一緒にいたいでしょ？」

☆☆☆

小さな勇気を胸に僕は一步を踏み出す。

この勇気を誰か誉めてくれないだろうか。

胸の中にポツと灯った小さな明かりが恥ずかしげに揺れている。

あの日、熱を出してぐらりと傾く体をそっと支えてくれた君に

ありがとうの感謝と僕の気持ちを携えた言葉を伝えるため、

君への一步を。

☆☆☆

月の光は人の心を惑わせると言うけど、抱かせてと言われてその気になるなんてどうかしてた

。

だからあなた、私に微笑まないで。

愛してるなんて甘く囁かないで。

やっと一緒になれるなんて嬉しそうに抱きしめないで。

これは気の迷い。

惑わせたのは月なのよ。

優しいキスも何もかも。

☆☆☆

君に会えるのはいつだろう。
もう百年くらい会ってない。
君は今どんな姿かな？
以前の君は燃えるような赤い髪をしていた。
僕はあるに忌み嫌われていた黒髪に黒い瞳なのにここでは普通なんだ。
ああ君がどんな姿でも愛せるよ。
でもお願い。
蛙だけはやめて。
キスできそうにないから。

☆☆☆

仕事帰りのデパ地下でクリスマス仕様の小さなケーキを見つけた。
町は年末の金曜日で賑わってるからこれくらい許されるよね。
今日来られない彼の代わりにお持ち帰り。
電気消してロウソクに火を点け写メして彼に送ったら、即返信が。
「イブは絶対二人でディナーな！」
残業お疲れ様。

☆☆☆

「さあ起きてお寝坊さん」
彼はそう言って布団を剥がそうとする。
そうはいくかとふわふわの布団を一生懸命抱きしめた。
「早く起きないと朝ご飯が冷めてしまうよ？」
それでも今はぬくぬくしたいの！
すると彼は耳元で
「もう一回しても？」
反射的に起きた私に甘いキスが降り注ぐ。

☆☆☆

近所のお店のショーウィンドーに飾ってある白いショールがとても素敵で、
ボーナスが入ったら絶対買うんだ！って意気込んでいたのに、

ある日なくなっていた。

縁がなかったと思って諦めていたらクリスマスの朝ツリーの下にそれがあった。

「ありがとうサンタさん」

夫に抱きついた。

☆☆☆

首筋を冷たい指がかすって中に入れていた髪の毛のしっぽを引き出されてつんって引っ張られた。

いつものことだけどそれいやなんだよ？

「おはよ～」

おはよう。髪の毛引っ張るのが好きなの？

「だってあったかい」

なんて無邪気に笑うから、仕返しにボクの冷たい唇を君の頬に押しつけた。

遠くの街からお兄様が帰っていらして、

「お前に」

と赤い椿の花を下さった。

ああなんて鮮やかな赤色でしょう。緑の葉によく映えます。

「美しい椿の花は白い雪の中でひっそりと咲いていたのだよ」

と教えてくださったお兄様は、幼い頃と同じように私の頭を優しくそっと撫でてくださった。



あの時の椿の花は、ここで摘まれたのでしょうか。

降りしきる雪の中、ひっそりと咲く赤い椿の花をひとつ、両手におさめて粉々に砕きました。

お兄様は遠くの街で可愛らしいあね様とご結婚なさったそうです。

私の、お兄様への赤く鮮やかな気持ちは、白い雪の上に華々しく散ったのです。

(碓地 海様のイラストについのべしました。ありがとうございました。m(__)m)

階段を上がっていると、次の階に両手にこんもりとお菓子をを持った律を見つけた。

律も俺を見つけて

「お菓子くれないと悪戯するよ！」

等と無邪気に言うので、二段飛ばしで駆け上がり彼女の所へ。

お菓子をもらえと思ったのか律は満面の笑み。

「ねえお菓子は？」

「ないから悪戯で」

律はきょとんとして悪戯と言った俺の真意を考えていたみたいだが、

「わかった！ ちょっと持ってて」

俺の両手にお菓子を渡すと、脇をくすぐり始めた。

が、そんなにくすぐったくないから無視してたら、今度はブレザーの裾から手を突っ込んで俺のへそをくすぐった。

両手をふさがれているから払いのけることも出来ずされるまま。

へそから脇から胸からさわさわされるとさすがにくすぐったいが、心頭滅却すればというやつで何とか堪えた。

どんなにくすぐっても無反応だからか律は不機嫌全開で俺からお菓子をひったくった。

そして

「べー！」

って舌を出して行ってしまった。

悪戯完了か？

ホントはこっちが悪戯してやりたかったけどな～なんて思っていたら、律がくるりと振り返って勢いよく歩いてきて俺のポケットをお菓子だらけにした。

悔しそうに

「今度はまけないから！」

っていつから勝負になったんだ？

「そんじゃ今日は俺の勝ちということで」

ポケットのキャンディの袋をひとつやぶって口の中に入れた。

甘いミルクの味。

廊下をちょっと見渡して誰もいないのを確認すると、律の顔をがしっとホールドして唇の中に舌で甘いミルク味を押し込んだ。

まっ赤で何も言えないお前って可愛い。

口の中のミルク味はおそろいだな。

斉藤君と律の一作目はサイトにあります。よろしければ。

[ゆかたで花火！](#)

文化祭の準備に奔走する生徒会のみんなをじーっと見てた。

せっかく遊びに来たのに忙しそう。

「手伝え」

プリントの山を運ぶんでた斉藤君が言った途端、窓から入ってきた突風でプリントが散乱。

二人で慌てて拾って顔を上げたら斉藤君の顔と唇の感触。

机の影だから見えなかったよね？

残業で遅くなった帰り際、課長に掴まった。

「送るよ」

「いえ、一人で帰れますから」

送ってくれるだけじゃないから嫌なんだけどと思ってたら普通に送ってくれた。

拍子抜け。

降りようとしたら腕つかまれた。

「物足りないな。このまま何処か行って涙声で鳴かしてみたくなる」

って迫るな！

☆☆☆

「お菓子か悪戯か」

と言われてもなにもないわよ。

「ありません」

「じゃあこれ食べさせてよ」

差し出されたのは半分溶けかけた飴。

仕方なく袋を破いてねとつく飴を出すと、課長の口に放り込む。

あ一指先汚れちゃったと思ったら手をつかまれて丹念に舐められた。

.....悪戯すんなああ！

☆☆☆

髪がふわりと着地した。

後頭部が冷たい机の感触をゆっくり感じて、これからの期待感に少しココロが浮き立つ。

服の裾が引き出されキスの雨が降ってくる。

残業で二人きりとはいえ、誰かに見られたらと思うと抵抗した方がいいに決まってるけどまあいいや。

忘れるくらい夢中にさせて。

☆☆☆

帰ろうとすると必ず現れるんだよなあ。課長。

今日は仕事で疲れてあのセクハラ受け流すだけの体力も気力もないんだよ。

そう思ってたら同僚が通りかかった。

「ねえごはん行かない？」

にっこりしたに硬直され

「遠慮しておくよ」

と断られ……ふり向けば課長が鬼の形相で立っていた。

机の中にあるはずの使っていない鉛筆を探していたら、緑色の石を見つけた。

こんなものを入れたらどうか。

親指と人差し指で摘んでぐるりと見てみて小さい目と口がマジックで描かれているのを見つけた。

ああこれは宝物だったものの一つだ。

過去の自分との会合に頬がゆるむ。

☆☆☆

「金木犀が香るとあなたが生まれた日を思い出します」

そんな手紙を母が送ってきた。

ピンクのコスモスが風に揺れ、金木犀の香りが街いっぱい広がる頃、私は一つ年を取る。

「ありがとう」

母への返事を投函して青空を見上げた。

また一年、楽しい思い出を増やせる幸せに感謝して。

☆☆☆

秋の落ち葉をかさかさとはとばして、

ちらちら降り積もった新雪を踏みしめ、

桜の花びらが頬に触るのを敏感に感じて桜と空を見上げ、

日陰にしかいられない夏の街を歩く。

そうして一年が過ぎ、

木の葉が色づきひらりと落ちた。

また一つ年を取った私は、

ゆっくり落ち葉を踏みしめる。

☆☆☆

「私生活を覗かれたくない」

と同居人が自分の部屋に鍵を付けた。

自分も秘密の一つや二つけどさ、同居してて鍵を付けるか？ まさか女？

好奇心に勝てずヤツの部屋を隙間から覗いた。

鏡の前でフリフリの服を着てる女の後ろ姿が見えた。

でも鏡の向こうで同居人の顔をしてる奴は
「誰？」

☆☆☆

なにが悲しくて三連休の初日に風邪をひくか。
熱は3日間38度をキープ。
咳も辛い。頭も痛くて外から聞こえる日常の音も邪魔なくらい。
でもヒマ。
ヒマだからメールでも打つかあ。
友達宛に「SOS。なんちゃって」って送ったら、血相替えて飛んできた友達にしっかり飛ばされた。

☆☆☆

日陰で本を読んでいる彼女を抱擁した。
背中に伸びる黒く艶やかな髪を撫でながら、しっかりと。
彼女は驚きながら本を落として...
なんて妄想しながら、窓の外から見える体育館裏で一人本を読む一年女子を見下ろしていた。
サボりか？
俺もサボって本読みたいわ。
理由はどうであれ。

☆☆☆

夕方コンビニに寄って晩飯の調達をしていると小さな子どもが「お菓子買ってよ」と泣いて母親を困らせていた。
しかし母親にしては若いなあとよく見てみたら元彼女で。
「久しぶり」
と声をかけたらめっちゃ硬直してから泣き出した。
「こんなところで逢わせたくなかった」
ってどんな罨？

☆☆☆

かたんかたん心地よい電車のゆれにまかせていたら、いつの間にか眠っていたようで、最寄

り駅よりもかなり遠くなってしまった。

山に囲まれた線路の向こうにトンネルが見える。

どうやら終点まで来てしまったらしい。

まあいい。

もう一度寝ればまた都会のど真ん中に出るさ。

(ツイノベの日・お題・鉄道)

☆☆☆

暑い夏が去り涼しさが寒さになる頃になったのにあいつは半袖で登校してくる。

暑がりなんだろうけど見た目が寒い。

「ちゃんと上着着ろ！」

って先生に注意されてようやく鞆から上着を出して渋々着るけど。

次の朝なんでって聞いたら「南極に行きたいから」だって。

ドラマ見たから？

☆☆☆

晩ご飯に何を作ろう。

スーパーでお肉コーナーと魚コーナーを何度も行ったり来たりして毎晩悩む。

電波的に彼の思考が飛んでくるといい。

耳を澄ませて神経とがらせて敏感にキャッチ！

なんて思ったら側にいたガキンちょが

「まーおさかな」

そうか君ん家は魚か。

じゃあ肉にする。

休み時間学校を抜け出した友達が大きい肉まんを食べていた。

おいしそうな匂いに空腹が増してくる。

口の中に唾がたまってきた。

放課後まで我慢できそうにないと思ってたら

「食うか？」

半分に割ってくれた。

「え？」

「ヨダレ流して我慢してるヤツ無視して食うほど無神経じゃないよ」

☆☆☆

子どもが草笛を吹いている。

音は広く濃い青空にとけていく。

刈り取りが終わった田んぼのあぜ道には萩もコスモスも枯れて、ただすすきがゆれている。

ゆっくりと秋が深まり、やがて冬の白い季節を迎える。

子どもが手を振る。

私も手を振り返して笑う。

穏やかに、ただ穏やかに。

☆☆☆

帰宅する頃めっきり寒くなり、みんな厚着するようになったからこの状況は予測できた。

電車内がナフタリン臭い。

いったいどいつだよこんなに臭いの着てるのは！と思ってたら、

次の駅で降りていったおばあちゃんからナフタリンの臭いがした。

なんとなく田舎のおばあちゃんに電話したくなった。

☆☆☆

一人で歩いている小さい僕がいた。

しゃがんで目線を合わせた。

どうやら迷子になってしまったらしい。

頭を撫でてやると、

「このまま一緒にいたい」

とおねだりされた。

君。

大きくなっても何度も迷子になって何度も選択するんだよ。

僕もたまに迷うけど、必ず君は僕にたどり着くよ。

☆☆☆

遠足のおやつは300円まで。

大抵駄菓子やさんで買う。

でも綾ちゃんは300円のうち150円つかってポッキーを持ってきてた。

その輝きたるや。

羨ましくて次の遠足にポッキーを持って行ったけど食べる頃にはチョコが溶けて一体化していた。

どろどろのチョコの、甘く苦い思い出。

☆☆☆

家族の中で自分だけが血液型が違うせいかな、自分だけ家族のノリに遅れることがある。

物事は大抵多数決だから思い通りにならない。

やっぱり私はお父さんとお母さんの子じゃなんだわ。

拗ねて押し入れにこもっていたら、お母さんが私を抱っこして笑った。

「小さい頃の私そっくりね」

(ツイノベの日・お題・血液型)

☆☆☆

私の血液型がA型だったらよかった。

そしたら忘れ物もしない。

ノートもきちんとして、宿題も整理整頓もできて、机の中はプリントでぐちゃぐちゃじゃないだ。

「A型に生まれたかったな」

って言ったら一緒に片付けてるお母さんに

「関係ないわ！」

って叱られた。

(ツイノベの日・お題・血液型)

☆☆☆

朝ご飯の目玉焼きが半熟でおいしかった。
通学路は落ち葉でいっぱい踏んで歩くといい音がした。
雫がピンクの山茶花についてキラキラしてた。
学校の廊下であの子とすれ違った。
給食はカレーだった。
宿題が少なかった。
今日は幸せに終わると思ってた。
夜もカレーと知るまでは。

☆☆☆

まさかの風邪にがっかりしている子どもの背中を見て、気の毒に思いながら自分もそうだったと微笑む。

私も遠足の日にはきまって風邪をひいていたっけ。
そういうのも遺伝するのかしら。
ゆっくりと背中を撫でて
「今度お母さんと一緒に行こうか」
と言うと泣き出して抱きついてきた。

☆☆☆

眠りの淵で魚さんとたゆたっていたのに、いつのまにか浅瀬に押し上げられていた。
そろそろ起きろと声も聞こえるけど、このまどろむ時間が好きだから待って。
あったかくて気持ちいい。
髪の毛の先までゆったりできるんだけど……
「早く起きろ！」
兄に布団を剥がれるこの瞬間が嫌い。

☆☆☆

衝撃の事実というのが毎日のようにテレビの中から聞こえてくる。
確かに一つ一つは目を覆いたくなるような衝撃的事実だが、たくさん見てしまうと
「ああまたか」
と思ってしまう。
でもリアルな「衝撃の事実」には呆然と立ち尽くすしかない。
牛乳一本こぼした絨毯は復帰可能だろうか？

☆☆☆

今日は娘の誕生日。

彼女に言葉を送るなら、

「生まれてきてくれてありがとう」

じゃなく

「生きていてくれてありがとう」

がいい。

これからも是非「生きること」を存分に楽しんでください。

あなたの笑顔はみんなを幸せにする力があるのだから。

...実際には恥ずかしくて言えないけどね。

☆☆☆

化粧をするのをやめなさいと言われた。

でもだんだん綺麗になっていく自分を見るのが好きなんだ。

肌が白くくっきりした目元に艶やかな唇。

自分でなく他人でもない、微妙な距離感も気に入っている。

鏡の向こうの綺麗な女の子に心の中で問いかける。

「僕のこと好き？僕は好きだよ」

歌うと体の中がからっぽになる。

イヤなこともいいことも困ってることもうれしいことも

何もかもが音となって空気を震わせて出て行って、君の耳を震わせる。

その歌は僕だから、受け取ったら是非拍手を頼むよ。

そしたら君の気持ちが音になって僕の耳に届くから。

☆☆☆

止めることが出来なかった。

これから起こることがどれだけの悲劇を生むか知っていても、私は声を上げられなかった。

後悔とこれから起こるだろう悲劇を思って落ち込む。

これからも私は流されて後悔で泣くんだろう。

自分の一言はとても軽くて弱いことを知ってるから。

☆☆☆

日めくりカレンダーの残りが少なくなってきた。

毎日毎日同じように捲ったはずの日々の大半は飛ぶようにすぎた。

頂いた新しいカレンダーをその後ろにかける。

ちらりと見えた一枚目と正月に会える人たちの笑顔が重なる。

もうすぐだね。

また会えるね。

一年ごとの幸せに顔がほころぶ。

☆☆☆

干支が一巡して十二回年を取った。

鏡の向こうに十二年前とひと味違う自分があるはずだったのに、あの頃と同じような服装で同じような考え方をして相変わらずそばにいるあなたが私を甘やかしていた。

「あなたのせいよ」

と睨むと

「そのままの君が好きだから」

と言われて答えに詰まった。

(ツイノベの日・お題・一巡・ふりだしに戻る)

☆☆☆

ゲームのコマは普通に学校に入り仕事をして結婚し子どもを育てて家を建て、
晩年は静かに暮らすはずが、宇宙旅行に行った末波瀾万丈に終わった。

ダイスを握りしめ彼は泣く。

「ふりだしに戻ってやり直せないかな？」

人生の選択肢はいくらでもあるから簡単に投げるなど誰かが呟く。

(ツイノベの日・お題・一巡・ふりだしに戻る)

☆☆☆

押し入れの隅で見つけたのは埃にまみれたくまのぬいぐるみ。

娘はヨダレと鼻水でべたべたにしたそれをよく抱っこしていた。

つまみ上げて風呂場で何度も洗って柔軟剤につけ込んむ。

嫁に行ったあの子はもうこの家にはいない。

頬を伝った涙が洗面器で柔らかい香りに浸るくまに染みた。

☆☆☆

部活が始まるまで後二十分。

真っ暗なグラウンドの向こう側から明るいオレンジ色の朝日が昇ってくる。

走る自分の息が白く凍っては溶けていく。

息があがらないように軽く流してただけなのに不意に抜かされむっとした。

「おはよ！」

朝日をバックに手を振る友達が憎らしく眩しい。

☆☆☆

坂道を自転車でノーブレーキで思い切りスピード出してたら

「パン！」

って軽いけど爆発音がした！

びっくりしてふり向いたとたん、ハンドル取られてふっとんでそのまま横倒しで坂道を転がった。

痛い。

よく見たら後輪パンク。

財布も痛い。

☆☆☆

手を伸ばす。

もう少しで届くのに、あと少しで手が届くのに。

でもここから出ることが出来ない。

「た、たのむ、後生だ」

目の前で仁王立ちする先輩を上目遣いで見上げて手を伸ばすと、ふんと鼻を鳴らし

「いい加減コタツから出てこい」

と言いながらも箱の中の蜜柑を取ってくれた。

「未来ある諸君に告ぐ！」

緑が濃い森の中。

黄色のラジオは賑やかに音楽と怒鳴り声を奏でていた。

「立ち上がれ！」

電波に乗ってくる男の声は興奮していた。

小鳥が鳴く声。

水が岩を流れる音。

木の葉のざわめき。

がさりと獲物が歩く気配。

「今こそ戦いの時！」

ぱちりとラジオを切る。

☆☆☆

突風で巻き上げられた砂は舞い上がり街の隅々に行き渡る。

外で口が開けないこの街には彼しかいない。

たまに私が食べ物を運んでくる以外は。

「退去勧告は理解してるけど、まだ諦めきれないんだ。僕の街が砂漠に飲まれた訳をはやく知りたいから」

老いた父は儚くベッドで笑う。

☆☆☆

海辺の町に母の終の棲家を作るためロボットやミサイルで町を更地にして再構築するはずが、生き残った人たちはしぶとく町を作り始めた。

町には歌が満ち若者達の声がこだましている。

呆然とする私の手を握り母は言う。

「帰りましょう。私も自分の家がいいわ。人が生きてこそその町よ」

☆☆☆

現状維持のまま待機と言われたから、夜空を眺めていた。

まっ黒な夜空にぽつぽつ穴が開いていて外の世界から小さな光が漏れているんだと思っていたら、星は遠くにあってすごいでかくて宇宙に浮かんでるんだと。

俺を無知だと笑った奴は死んだ。

無知でも生き残った物が勝ちだろ？

僕は生まれてすぐから一人だった。
だから僕は人生の全てを注ぎ込んで機械人形を作った。
彼女の前では誰もが感嘆の声を上げる。

「ああなんてこと！これが機械人形なの！」

賞賛はあたりまえ。
だってこんなにもニンゲンに似ている機械人形はみたことがない。
僕の友達は最高なのだ。

皮膚は産毛が生えていてうっすらと汗をかく。
声はかぎりなく優しい声。言葉づかいも自然になるように心がけた。
僕を見つめる彼女の瞳はパーツを替えれば色など思いのままだ。髪の色も肌の色もだ。
彼女は僕の言うことは何でも聞いた。
彼女と一緒にだと、僕はとても幸せだった。

でも彼女は大量の電気を必要としていたから、常に電源を差していなければならなかった。
散歩をする時はバッテリーパックが必要だった。

ある日僕は彼女に素晴らしい贈り物をした。
最近発見された夢のエネルギーで小さくていくらかでも電気を作る。
彼女にそれを組み込んだ。
これで彼女はずっと生きる。
僕が死んだ後も。

彼女との蜜月は何十年と続いた。
その間に僕たちはもっともっと仲良しになり、彼女がいない生活など考えられなくなっていた。
。

そんなある日、彼女に組み込んだエネルギーが毒を持っていることがわかった。
人体に影響を及ぼすとても悪い物質だ。
人はそれを吸っただけで死んでしまう。

彼女にそのエネルギーが使われていることはみんな知っていた。

だからみんなが僕の所に来て彼女を壊せと行った。

壊せるはずがない。

長年の僕の友達だ。

僕の彼女だ。

僕の大切な、生き甲斐なんだ。

僕は年寄りだ。彼女の介護なしでは生きていけない。

大切な彼女を奪わないでくれ。

何十年と連れ添った彼女を目の前で壊されそうになり、気が狂いそうになった。

「頼む、彼女を助けてくれ」

と泣いて叫んだ。

その時、

「彼女を助けます。ですから言うことを聞いてください」

力強い手が僕の前に差し出された。彼は著名な工学博士だった。

シワだらけの手でそれを掴むと彼は握り替えしながら言った。

「彼女からアレを取り出すのです」

彼女の全てを失うくらいなら……。

僕は彼女からあのエネルギーを取り出すことを承知した。

エネルギーを取り出すため、解体されていく彼女をみるのはとても辛かった。

全て順調に進み、もう一度組み立て直した彼女をみて、僕は涙が止まらなかった。

昔のようにひもつきで再起動した彼女は僕の名を呼び、優しく微笑んだ。

「マスター」

ああ、ああ……。

言葉がなかった。本当に嬉しかった。涙が止まらなかった。

それから彼女との生活がまた始まった。

彼女はまたひもつきになってしまったが僕は幸せだった。

僕は未来永劫、彼女を慈しみ愛すると誓い、長い眠りについた。

「どうしてうちには紐付きロボットがいるの？ 今はもっとクリーンでコンパクトなエネルギーがあるのに」

そう言いながら工学博士の娘はロボットにまとわりつく。

博士は言う。

「あるよ。でも、彼女はこの方がずっと幸せだと思うから」

ひもの先には彼女専用の自家発電機に繋がれている。

それは風に遊ばれ、くるくると回る……。

夏に書いたBUN-BORGというお話の番外編的なお話です。
よろしければ。

勝てると思った相手に勝てなかった。
たまたま出てきた武器があまりにもちゃちに見えたから油断したのだ。
...いや、あれは僕の負けだ。
己の敗北を認めてこそ強くなれる。
今は勝つことだけを考えよう。
防具の特性を活かした武器の選別をしなければ。
焦るな。
あいつはただの同級生だ
(桜居のつぶやき)

☆☆☆

ボコスコに殴られて薬盛られて唾吐きかけられて、この世にいいことなんて一つもないと泣いた。

逃げているところを男の人に助けられてバーの一角で手当してもらった。
店を出ようとしたら巨大スクリーンで男達が戦う姿に目が釘付けになった。
「やってみるか？」
とマスターが笑う。
それから俺はデュエリストだ。
(シルバーのつぶやき)

☆☆☆

右手を軽く握って剣を出す。
目の前には水晶の帝王と呼ばれる伝説の人物。
精悍な顔つきに鋭い眼光。
敵う相手と思わないがかなりのご老体だ。
「あなたはどのように戦うのですか？」
間を詰めながら問う僕に帝王は微笑む。
「戦いとは、生きることと見つけたら」
それがあなたの答えか。
(勇司のつぶやき)

ロボットのついのべ

ロボット系ついのべまとめ

うん、ロボット好きなんです。

「マスターが死んだ後私は誰かの者になるのね」

添い寝してたほたるちゃんが呟く。

昨日読んだお話のせいかな？

マスターを亡くしたロボットの話。

「でも彼女は新しいマスターと一緒に仕事をして幸せだと思うわ。長生きしてね」

頭を撫でると彼女はぶいと横を向いた。

「マスターもね」

☆☆☆

パンに切り込みを入れて軽く炙ったところにバターをた〜っぷり塗り込めてたらマスターを呼ぶ。

「早く起きて。朝ご飯できてるから」

「ん〜おはよ」

そのままベッドに引きずり込まれて彼の名前を呼ばれてキスされた。

直後、夢から醒めたマスターは自己嫌悪でベッドに沈んだ。

([ほたるちゃん](#)番外)

☆☆☆

おはようって言えばおはようって答えてくれる友達が欲しかったから君を作った。

おはようと言うとおはようと言う。

それだけだと淋しいことに気がついた。

ハイレベルな学習機能を付けたら君はどんどん賢くなって語彙も増えた。

でもおはようと言うと愛していると答えるのは何故？

☆☆☆

好きという感情は甘く切なく残酷だ。

私は彼がすごく好きで、彼も私を愛していると言う。

彼が人格プログラムだとしても一緒なら幸せ。

一生触れることは出来ない彼と液晶越しに手を合わせる。

唇を寄せる。

冷たい液晶に残ってしまったキスと涙の跡を拭き取って悲しむ彼のために笑う。

☆☆☆

できそこないの幼児教育人格プログラムの俺に体をくれたマスターは、俺の動作確認をした後、机にもたれて眠ってしまった。

ベッドに運んで子守歌を歌わなくては。

ゆっくり抱き上げると予定通りの大きさと重さに感嘆した。

なあ。もう子どもじゃないんだから俺なんていないだろ？

☆☆☆

マスターの誕生日だからなにかプレゼントをしようと思った。

何でももらうとうれしいじゃない？

無難なところでデスクトップアクセサリとかお宝画像とか？

でも、やっぱ物だよな。

紙とペンで書いてみたけど、やべえ字が汚くて読めねえ。

まあ、いいか。

「誕生日おめでとう...な」

☆☆☆

「何がわかるの！」

叩かれてマスターの拳が血にまみれていく。

やがて自分の拳を見つめて笑いながら泣き崩れるマスターを、慈悲の微笑みながら抱きしめる

。

そうプログラミングされている。

「マスター、大丈夫だよ。心配するな」

いつもの台詞を繰り返す。

地獄と天国の中間地点にて、悪魔になるか天使になるか決めかねていた俺に、神から
「早く決めろ」
と手紙が届いた。
天使になって人々を導くか、悪魔になってそそのかすか。
どちらも魅力的だが面白味に欠ける。
なので両方に翻弄される
「人間にしてください」
と頼んでみた。
神様苦笑。

☆☆☆

暗闇に沈む駅のホームに一人立つ。
赤さびが付いた線路を草が隠しているが、昔は銀に輝くの線路だったなあ。
やがて目の前に赤い電車が現れた。
ドアから僕の大切な人がホームに降りて懐かしそうに手を伸ばす。
「もういいのですか？」
私は手を取る。
「長い間生きた。もう充分だ」
(ツイノベの日・お題・鉄道)

☆☆☆

森には誘惑がいっぱいだけど、青い花と黒いベリーを摘んで帰るだけだよ。
森の奥には魔女がいて、赤いりんごを大事に育てているんだ。
それを取ったら魔女は怒りで森の中を迷路に替えてしまう。
赤いりんごだけはダメ。
それがどんなに熟れていておいしそうでも、手を伸ばしてはダメ。

☆☆☆

真っ青な空から太陽の光を乱反射させて硝子の君が落ちてきた。
ルビーのような涙が君の頬を飾っている。
僕は両手を大きく広げて君を受け止める準備をしていたのに腕の中には赤い涙が一粒だけ。

君は地面にぶつかると四散した。
僕はここなのに。
拾い集めた君の欠片で僕は傷だらけだ。

☆☆☆

滑らかなりんごの手触りも、
オーブンから漂ってくる香ばしいかぼちゃパイが焼ける匂いも、
窓辺の赤い落ち葉も素敵な秋を告げている。
テーブルの上に所狭しと並べられたお菓子たちは、
ハロウィンのお化けに扮した子ども達のためのものだよ。
さあおいで子ども達。
僕の口の中に。

☆☆☆

街角で見つけた王女様はとても愛らしかった。
計画通り彼女をたらし込んで城に入り込み、非情で残酷な王を惨殺した。
自らが王となり一緒に暮らすはずが、彼女は城を追われた。
今でも食べ物と日用品を届ける。許しを請い、愛の言葉を贈るために。
それが残酷なこととわかっている。

☆☆☆

てくてくと言葉さんが歩いて行く。
訳を聞くと
「私はあてどのない旅に出るのです。
行く先々でたくさんの出会いや別れがあるでしょう。
時には恋もするかもしれません。
旅はよいものです。
あなたもいかがですか？」
僕は丁重にお断りした。
次に逢う時、あの時の君だとわかるといいな。

☆☆☆

君の涙が僕の体に涙が染みてくる。

こんなに短い腕では君を抱擁することは出来ない。

ぬいぐるみって存在はとても無力なんだ。

僕の手触りが好きだと言ってどこに行くにも片時も放してくれない君を愛しているよ。

でもたまには僕を洗ってね。

お母さんは僕を捨てたいみたいだから。

☆☆☆

おばけは年に一度だけ地上に出られる。

興味津々で地獄から顔を出すと、おばけ達がニンゲンを恐がらせようとがんばってた。

でもニンゲンは興味なさそうに「気のせい」って言う。

だから思いっきり雪を降らせたよ。

ニンゲンは空を見上げて写真を撮って「綺麗」って笑った。

.....あれ？

☆☆☆

今日はお父さんと会える日。

お父さんはハロウィンにご先祖様達を地上に連れてきて、また連れ戻すお仕事をしているからなかなか会えないの。

お母さんはご先祖様のためのティパーティの準備。

私はたくさんお菓子を焼いたわ。

お父さん早く来て。

来ないとキスしてあげないんだから。

([トートとカボチャと森の魔女](#)番外)

☆☆☆

手も、脚も動かない。

冷たい金属の鎖で拘束されているからだ。

ああ、これは夢だ。

平和な日常にこんなことが起こるはずがない。

よだれを垂らした怪物が俺を食べようとするなんてことがあるわけない。

足下に散らばる服や骨の残骸もどす黒い血の跡も全て夢だ。

頼む俺、起きろ。

☆☆☆

都会の片隅の小さな森に小さな祠があります。
そこには小さな神様が住んでいて人たちの暮らしを見守っています。
小さな神様は力が強くないので拜んでくれる人は近所の女性だけ。
小さくなった背を屈め一心に祈る彼女の想いを虹にして
大切な人に届けるのが最近の楽しみなのですよ。

☆☆☆

指先の傷や無理して扉を打ち続けた腕や足がじんじんと痛む。
地下牢に閉じ込められてもう丸一日。
このままでは彼女が魔女として処刑されてしまう。
その時、明かり取りの窓から見える月を彼女が遮ったと思うと窓を蹴破って降りてきた。
「お腹空いたわ」
俺は首筋を彼女に差し出す。

☆☆☆

子ども達の手紙はサンタさんの家から溢れそう。
でもサンタさんは一つ一つ大事に見ていくのです。
中には叶えてあげたいけどサンタさんでは叶えられない願いもあります。
そんな時はお手紙を神様にお届けするのですよ。
例えばこんな願い…。

「世界中の人が幸せでありますように」

サンタさんとカメラ

夜空に現れるだろうサンタをとらえるため超望遠レンズのカメラをベランダにセットした。
ありったけの毛布にくるまり湯たんぽをかかえて見上げる夜空から白い雪が降り出した。
悪戯大好きで悪い子の僕の所にサンタは来ないと母は言う。

上等だ！

サンタを激写して雑誌に売ってやる！

意気込んでベランダに貼り付いたものの、サンタはなかなか現れない。

時計は夜十時を指している。ちらちらと降り続く雪も毛布の隅に積もってきて寒いし眠い。

もう温かいベッドに入って眠ってしまおうかとカメラを空に向けると、一筋の光がこちらに向かってきた。

よく見るとソリだ。

トナカイ二頭立てのソリはベランダの側で止まった。

そして温かそうな服を着た白いヒゲのおじいさんがこちらを見ていた。

ホントにサンタだ！

シャッターを何度も押してフラッシュをたきまくと、おじいさんは眩しそうに目を細めた。

「どうしてこんな遅くまで起きてるんだい？」

「サンタさんの写真が欲しかったんです」売るためにとは言えなかった。

するとおじいさんはうれしそうに目を細めると

「そうかい」

と笑いながらソリの後ろに積んであった袋の中に手を入れて、小さな箱を取り出した。

「これは君へのプレゼントだよ」

思わず激写！

これは高く売れるぞ！

おじいさんはトナカイのソリに乗ってまた何処かへ飛んでいった。

寒さで手が震えるけど、すごいぞ！サンタを撮ったのって世界中でも僕だけじゃないか？

雪で濡れた毛布を放置して小さなプレゼントだけ持って部屋に入るとベッドに潜り込んだ。

明日撮れてるかたしかめなくちゃ。

朝、早速起きてカメラを点検した。

でもそこにうつっていたのは夜空と雪だけだった。

「なんだ、夢だったのか」

そう思って枕元を見れば、サンタクロースが渡してくれたプレゼントが。

急いで開けてみると何も入ってなかった。

ち、ちくしょう！

やっぱサンタなんてくそくらえだ！

がっかりしてリビングに行くとお母さんが泣きそうな顔をしてた。

「ごめんね」

お母さんの手には昨日サンタがくれた箱と同じものがあった。

「お母さん夢の中でサンタさんに怒られたわ。よい子なのにおまえには来ないと言って悪かったわ」

そしてお母さんはおもいきりハグしてくれた。

お母さんの箱を開けてみたけどやっぱり中は空っぽ。

でもなんだか気持ちがほこほこしたよ。

「僕、サンタさんに会って写真を撮ったんだ」

僕は自分の部屋からカメラを持って来て

「これで撮ったんだよ」

確かめてみたらさっきは何もなかったのに、一枚だけ笑うサンタさんが写っていた。

ついのべまとめ2011年10月～12月

<http://p.booklog.jp/book/41423>

著者：みずきあかね

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akane2003/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41423>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41423>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.